

平成21年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ケンサキイカ

学名 *Loligo edulis*

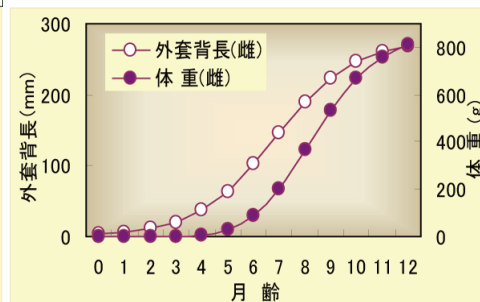
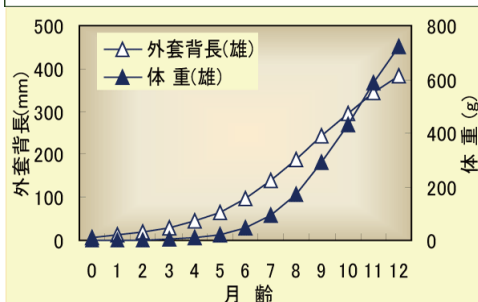
系群名 日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 1年
成熟開始年齢: 外套背長70～80mm(約5カ月)
産卵期・産卵場: 周年産卵するが、産卵盛期は春～秋季
索餌期・索餌場: 複数の発生群が存在し、それぞれに回遊経路は異なると考えられている
食性: 小型の魚類、甲殻類、軟体類を捕食
捕食者: 不明

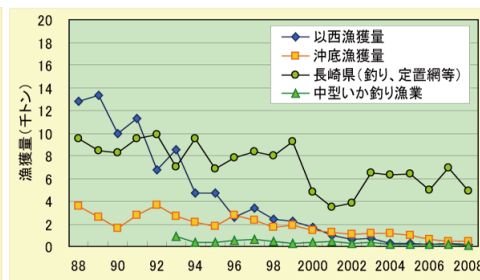
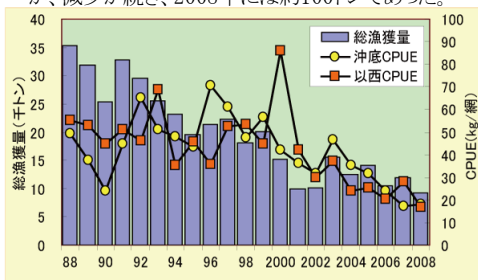


漁業の特徴

沿岸域では主にいか釣り漁業によって漁獲され、総漁獲量のうち長崎県が大きな割合を占め、盛漁期は夏季である。日本海沿岸域では盛漁期は夏から秋にかけてである。沖合域では底びき網漁業が主体となり、沖合底びき網漁業(以下、沖底)では長崎県沖合～山陰沖の広範囲に漁場が形成される。東シナ海では大陸棚縁辺域に南北に広くケンサキイカが分布し、主な漁場は東シナ海南部の陸棚域で以西底びき網漁業(以下、以西)によって形成されていたが、2004年以降は、以西は夏季に操業せず、漁業形態が大きく変化した。また、1991年からは東シナ海において中型イカ釣り試験操業が6～10月にかけて行われ、中心となる漁場は東シナ海南部である。

漁獲の動向

日本海西部～東シナ海における漁獲量は1988年には35千トン余りだったが、変動しながら減少し、2001年以降は10千トン前後の漁獲量となり、2008年には約9千トンであった。九州西岸～日本海西部では1988年の約24千トンから変動しながら減少し、2008年には約9千トンであった。一方、東シナ海南部は1988年には約11千トンの漁獲量であったが、減少が続き、2008年には約100トンであった。



資源評価法

沖底、以西、中型いか釣り漁業および沿岸域で主体となるいか釣り漁業の漁獲動向から資源動向を判断した。沖底と以西では漁獲努力量が減少しており、特に以西で減少傾向が著しいことから、CPUE(努力量あたり漁獲量)を資源動向の指標と考えた。沿岸域については各県代表港のいか釣り漁業の漁獲量およびCPUEを資源状態の指標として考えた。

資源状態

動向	水準
→	高位
	中位
	低位
横ばい	

ケンサキイカ資源には複数の季節発生群が存在することが知られており、豊度の高い発生群を利用し、豊度の低い発生群を守る管理が理想的である。2004年以降は、かつて主要な漁場となっていた東シナ海南部における漁獲量が落ち込んでいるが、この海域には中国船も多数出漁しており、漁獲実態を把握するのは困難である。現状では資源の指標値に合わせた漁獲することが現実的であろう。資源水準は低位で最近5年間(2004～2008年)でみた資源動向は横ばいである。資源管理方策としては現状程度の漁獲にとどめることが望ましい。

	2010年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	93百トン	1.0C2008	—	—
ABCTarget	75百トン	0.8・1.0C2008	—	—

- ・ 資源水準は低位、動向は横ばい
- ・ 2004年以降以西底びき網漁業は東シナ海南部漁場にほとんど出漁せず、この海域における漁獲量が落ち込んだ

- 現状では資源量の指標値に合わせて漁獲するのが現実的であろう
- 東シナ海全域での資源状態の正確な把握には、関係国間の協力が必要である

資源評価は毎年更新されます。